

# 意見表明に用いられる「かなと思う」

## — 対立・摩擦を避け内に向かう言葉 —

鈴木 智美

【キーワード】「かなと思います」、専門的立場、コメント、思考内容の共有の回避、曖昧な主張、自己防衛

### 1. 本稿の目的

ここ数年、テレビの報道番組や時事的な内容を扱う番組などを見ていると、評論家が解説を行う際、政治家が記者会見を行う際、あるいは一般成人の人々が街頭インタビューなどで意見を求められた際などに、「～かなと思います」<sup>1</sup>という形式を用いて、自身の見解・意見を述べるようすが、たびたび見られるようになってきている。例えば、以下のようなものである。

- (1) 〈毛利元就にまつわる「三本の矢」の逸話が史実ではないということについて〉：歴史学の専門家(男性・40～50代<sup>2</sup>)のコメント  
「(たとえ史実でなくても、そこから)<sup>3</sup>歴史学の世界に入って行くのもおもしろいかなと思います。」(14.06.24「ス」<sup>4</sup>)

例(1)は、発言者である歴史学の専門家が、ニュース番組の中で取り上げられた昨今の歴史ブームについて、専門家として一言、コメントを行った際のものである。興味を持った逸話がたとえ史実と違っていたとしても、それをきっかけに歴史の世界に入って行くのも悪くないのではないかというコメント内容である。

<sup>1</sup> 「かなと思います」の他に、「かな」が長音化した「かなあと思います」、および上昇イントネーションを伴った「かなと(かなって)思います」も観察される。実例を採取する場合には、これらの音声的特徴が明確に観察されれば「かなあ」「かなっ」と書き表すことにする。長音化した「かなあ」については、「あ」が不明瞭に発音された場合、「かなーと思います」のように長音符号を用いたほうがニュアンスを伝えやすいと思われる場合もあるが、これは現代仮名遣いとしては定められた表記法ではない。

<sup>2</sup> 話者の年齢については、特にそれを示す情報がない限り、本稿執筆者が用例を採取する際に見当をつけて記したものである。判別しにくい場合は幅を大きめに持たせている。

<sup>3</sup> 発話例における( )内の文言は、本稿の執筆者による補足説明である。

<sup>4</sup> 「14.06.24」は実例の採取日が2014年6月24日であることを示す。「ス」「7」「J」など、実例を採取した番組名を示す略記号は、本稿末尾にまとめて記している。

この場合、話し手である専門家は、通常のいわゆる意見表明の形式を用いて、「(そのような興味の持ち方も)おもしろいんじゃないでしょうか」、あるいは「おもしろいと思います(よ)」「おもしろいんじゃないかと思います」のように述べることはもちろん可能である。が、なぜここで、自身の見解を述べるにあたって「おもしろいかなと思います」と、「かなと思う」という形式を用いているのだろうか。終助詞「かな」は、従来「くだけた話し言葉」であり、「独り言」を述べる形式であるという指摘がなされている。テレビの報道番組における解説・コメントというのは、多くの視聴者を対象として述べるものであり、「かな」が独り言を述べる形式であるならば、報道番組のコメントとしては本来そぐわない形式ではないだろうか<sup>5</sup>。また、多くの視聴者を対象とするのであれば、そのような場面はある程度公的な性質を持ち、どちらかと言えば多少固い話し方が選択される可能性が高く<sup>6</sup>、述べる内容としては、視聴者にとって、やはりそれなりに意味のあるコメントが期待される場面であろう。「かな」が、「くだけた話し言葉」であり「独り言」を述べる形式であるという特徴を持つならば、「かな」を含む「かなと思う」という発言形式が、なぜこのような場面において選択されているのだろうか。

テレビ等のメディアで報道される場合、その発言者は、社会的あるいは政治的な問題等について、解説を行ったり状況を説明したり、問題点を指摘したり見解を述べたりする立場に立つ、何らかの専門性を有した人物である。あるいは、ある事柄について意見を表明することを求められている有識者であったり、一般成人が、街頭で社会的・時事的な問題についてコメントを求められる場合もある。観察する限り、男女の別なく「かなと思う」は用いられているようである。

本稿では、この「かなと思う」を1つのまとまりを持った表現してとらえ、上記のような形でこれが意見表明やコメントを述べる際に用いられるようになっていく事実を指摘し、その意味・機能について考察することを目的とする<sup>7</sup>。

---

<sup>5</sup> 実際に、政治家が時の政治的課題について記者からのインタビューに答え、「～かなと思います」と発言しているのを見た際、政治家としての期待される役割に反し、まるで他人事のように答えているかのような印象を受けたことがある。

<sup>6</sup> バラエティ番組的な要素を持った報道解説番組というものもあり、一概にすべての場面で固い話し方が期待されるとは言い切れない側面はある。

<sup>7</sup> 意見表明やコメント以外にも、会合の場で、あるいはメールでのやりとりにおいて、相手に対して何らかの依頼や要求を行いたい場合に、「～てもらえればいいかなと思います」「～ことが必要かなと思いました」等の形式を使って述べることで、間接的に「～してほしい／～てください／～することが求められていると考えてください」というような内容を伝える例も観察される。

## 2. 問題となる形式「かなと思う」

意見表明やコメントにおいて用いられる「かなと思う」には、その成り立ちを形式面から整理すると、次の2種があると思われる。

### 2.1 意見表明やコメントに用いられる「かなと思う」形式：タイプ1

意見表明やコメントに用いられる「かなと思う」として典型的に見られるのは、以下のような形をとるものである。

#### (2) 意見表明やコメントに用いられる「かなと思う」形式(タイプ1):

終助詞「かな」<sup>8</sup> + と思う

例えば、「それは{理解できる／理解できた}かなと思います」「それは少し{難しい／難しかった}かなと思います」「やっぱり心配{φ／だった}かなと思います」「そういう点は問題{φ／だった}かなと思います」<sup>9</sup>というような形をとって現れるものである<sup>10</sup>。実際に観察された例は、以下の例(3)のようなものである。

#### (3) 〈スマートフォンの使い過ぎに起因し、親指の付け根が腱鞘炎を起こす「ドゲルバン病」が増えてきていることについて〉：医師(男性・30代)

「(症状を訴えるのは)明らかに女性の方が多くて、基本的に30歳前後が多いかなと思います。」(14.09.10「ス」)

テレビの報道番組の中で比較的良好に見られるパターンで、ある問題について取材を行っていく中で、専門家からの「コメント」が差し挟まれるものである。ここで、発話者である医師は、専門家としてこの病について見解を述べているのだが、自身が診療にあたった経験から、罹患者について「30歳前後の方が多いです

<sup>8</sup> 終助詞「かな」も、その成り立ちを考えれば、疑問の終助詞「か」と、詠嘆の終助詞「な」が組み合わさったものであるとされる。

<sup>9</sup> な形容詞および名詞述語の非過去形の場合は、「だ」は脱落し、「心配{φ}かなと思う」「問題{φ}かなと思う」ようになる。「φ」は文法的要素が脱落していることを示す。

<sup>10</sup> 話し手の判断を非明確化して述べる「かと思う」(「それは理解できたかと思えます」「それはちょっと難しいかと思えます」「そういう点はやはり問題かと思えます」)に、終助詞「な」が挿入された場合も、表面上は同じ形式(「それは理解できたかなと思えます」「それはちょっと難しいかなと思えます」「そういう点はやはり問題かなと思えます」)をとることになる。韻律的特徴などを詳細に見れば、(2)に挙げた「かな + と思う」形式であるのか、この「かと思う」に「な」が挿入された形式であるのか、両者の違いは判別できる可能性はあると思われる。しかし、実例を観察した限りでは、一瞬のうちに話者がどちらの形式として「かなと思う」を用いているかは、必ずしも截然と分析的に区別されるものではないように思われる。本稿では、現段階ではこの2つのタイプは区別せず、「かなと思う」(タイプ1)としてまとめている。

ね」「30歳前後が多いようです」「30歳前後が多いように{思います／思われます}」などと述べるのではなく、「多いかなと思います」という表現形式を用いている。

第3節で詳しく検討するが、従来「かな」は、自身の疑念を独話的に述べるものとされている。これに「と思う」形式を接続して、聞き手に対し見解を表明する形をとっているわけだが、独話的な「かな」の使用が、専門家の行うコメントとしては、若干の違和感を生じさせるものとなっている。

## 2.2 意見表明やコメントに用いられる「かなと思う」形式：タイプ2

意見表明やコメントに用いられる「かなと思う」には、その成り立ちから見ると、次のような形のものもある。

(4) 意見表明やコメントに用いられる「かなと思う」形式(タイプ2)：

(「の」+)終助詞「か」+終助詞「な／なあ」+と思う

(4)は、例えば、「それは|理解できる／理解できた|のかなと思います」「それは少し|難しい／難しかった|のかなと思います」「やっぱり心配|な／だった|のかなと思います」「そういう点は問題|な／だった|のかなと思います」というような形をとって現れるものである。説明のモダリティを表すとされるいわゆる「の」だが、「のか」という疑問形式をとり、終助詞「な／なあ」が付加されたものである<sup>11</sup>。(2)に示した「タイプ1」との外形上の違いは、「かなと思う」の前に、「の」が前接するという点である。実際に、以下の例(5)のようなものが観察される。

(5)〈太陽光発電による電力の買い取り制限の方向性を受けて〉：太陽光発電の事業主(男性・30～40代)

<sup>11</sup> 表面上(4)と似た形をとるものに、「理解できるのではない(の)かなと思います」「それは問題ではない(の)かなと思います」というものがある。文末部分だけを見ると、同じく疑問の終助詞「か」に、「な」「と思う」が順に後接されている点で(4)と同様に見えるが、この場合は、本来意見表明に用いられ得る形式の「のではないか(と思う)」「ではないか(と思う)」に、終助詞「な」、および場合によっては説明のモダリティ「の」の「の」が挿入されたものと見ることが出来る。このような「～のではない(の)かなと思う」「～ではない(の)かなと思う」は、終助詞「な」が挿入されている点において独話的な性格が与えられているとは見られるものの、もととなる形式を見れば、これが意見表明に用いられること自体に大きな不自然さはない。「理解できるのではないか」は、話し手の判断が未成立ながらも一定の方向性を持っていること、即ち「理解できる」という見通し・見込みを持っていることを表し(宮崎(2002)、日本語記述文法研究会(2003:179-182)等)、「問題ではないか」は、問題である可能性を指摘する文(小池他編(2002:111))であると考えられるからである。よって、ここで問題としている、意見表明形式として違和感の感じられる「かなと思う」とは区別して、「～のではない(の)かなと思う」および「～ではない(の)かなと思う」は、ひとまず対象からは除いて考えることとする。

「ここで計画を中止すると、東北地方の復興にも水を差すことになるのかなと思います。」(14. 10. 15「7」)

取材を受けた事業主は、電力の買い取り制限について賛成はしていない。むしろ政府の方針転換に困惑している様子であるが、その反対の理由については、「東北地方の復興に水を差すことになる」ということに結び付けてコメントしている。その際、通常の見解表明の形式によって「水を差すことになるんじゃないでしょうか」「水を差すことになるんじゃないかと思います」のように述べておらず、「水を差すことになるのかなと思う」という形式をとって述べている。

このような述べ方からは、「(そのような方針転換をすると)東北地方の復興に水を差すことになる」という見解が必ずしも明確に主張されているようには感じられない。また、反対の理由表明の曖昧さと同時に、社会全体に関わる問題を指摘していると思われるにもかかわらず、あえて私的な印象としてコメントしているかのような、発言内容と使用形式とがそぐわないような違和感も感じさせる。

以上、ここでは問題となる「かなと思う」の形式的側面について確認した。2.1節で見た「かな+と思う」、および2.2節で見た「の+かな+と思う」は、表面上は、いずれも文末に「かなと思う」という形式をとることになる。本稿では、両者を包括的に「かなと思う」形式としてひとまとまりにとらえ、この形式を用いて意見表明を行ったり、コメントを述べる発話例を、実際のテレビ報道番組等から収集し、その使用実態を確認するとともに、意味・機能を検討する。

### 3. 先行研究における記述

ここでは、問題となる「かな」、「な」、「と思う」、およびこれらの複合形式である「かなと思う」について、先行研究における記述を確認する。

#### 3.1 「かな」

まず、タイプ1の「かなと思う」に見られる終助詞「かな」の働きは、以下のよう記述されている。(以下、執筆者が記述内容をまとめ、適宜下線を付した。)

(6)文化庁(1990: 210):

「疑問」の意味を表す。話しことばで使う。自分の疑問の気持ちをひとりごとを言うように表す場合、相手に質問する意味を表す場合、「～ないかな(あ)」の形で、「そうなければいい」という願いの気持ちを表す場合がある。

(7) 三宅(2000) :

「かな」の本質的な意味は「疑問内容を検討中であることの表明」である。通常の質問文とは異なり、聞き手への直接的な回答の要求は持っていない。この「疑念表明」のほかに、「弱い質問」や「丁寧さの加わった質問」という拡張の意味も持つ。

(8) 安達(2002: 174-202)<sup>12</sup> :

「かな」は〈疑い〉の文で用いられる。〈疑い〉の文では、何らかの情報が欠けているために話し手は判断が成立しておらず、〈質問〉の文を規定する条件のうち「不確定性条件」は満たしているが、聞き手に問いかけることによってその情報を埋めようという「問いかけ性条件」は満たしていない。〈疑い〉の文は、聞き手に対する伝達性を含まず、聞き手が存在しない状況や心内発話のような独話的な環境で使われる。

(9) 小池他(編)(2002: 109-110) :

疑問文には、聞き手に情報提供を求める「質問」(問いかけ)の文と、その場で話し手の意識にのぼった疑問点を述べるだけで、情報提供は特に求めない「疑問表出」(疑い)の文がある。疑問表出は、「だろうか」「かなあ／かねえ／かしら」で表される。疑問表出では上昇イントネーションは伴わない。

以上の記述をまとめると、「かな」は主として話し言葉で用いられ、話し手自身の疑問の気持ちを聞き手に問いかけることなく表明する、すなわち独話的に疑念を表出することを主たる働きとする表現であると言えるだろう。

### 3.2 「な」

次に、タイプ2の「(の)かなと思う」に見られる終助詞「な」について、確認する。(以下、執筆者が記述内容をまとめ、適宜下線を付した。)

(10) 文化庁(1990: 736-737) :

多く話しことばで使う。「なあ」の形も使う。感心したりがっかりしたり、うれしかったり悲しかったりした時、その気持ちを表す場合、「そうなればいい」という願いの気持ちを表す場合、「きっと～だ」「自分は～と思う」という意味を表す場合、自分の言うことに賛成してもらおうとしたり、間違いな

<sup>12</sup> 安達(2002)は、広く疑問のモダリティという観点から、疑問文の持つ機能を〈質問〉と〈疑い〉とに分け、〈疑い〉の文の機能と用法を「だろうか」「かな」を中心に考察したものである。

いか確かめたりする場合がある。

(11) 野田 (2002: 281-283) :

下降イントネーションの「な(あ)」は、独話で用いられ、詠嘆や回想を表すとも言われ、話し手が感情などを自分自身であらためて確認することを表す。聞き手の存在する疑似独話では、イントネーションが下降しない場合もある。聞き手に対して不満を表明する例もある。

(12) 小池他(編) (2002: 37) :

話し手の心の動きを直接表す詠嘆表現。「なあ」は詠嘆の「な」が強調されて長音化したもの。「な」は、聞き手が存在する場面では、詠嘆を表出するとともに聞き手への持ちかけとして機能し、主として男性が対等や目下の者に対して用いる。「なあ」は主として聞き手が存在しない場面で用いられ、聞き手が存在する場面で用いられる場合にも、独白的な詠嘆表出の発話となる。

(13) 日本語記述文法研究会(編) (2003: 260-265) :

聞き手の存在を前提とせず、非対話的な性質を持つ「な」は、男性・女性ともに用いられ、話し手が新たに認識した事態を表す。非対話的な「な」が対話の中で用いられた場合でも、聞き手に伝えることを強く意識せず、感情や想起したことを独話的に述べるという伝え方になる。「なあ」は、ある事態を認識したことから引き起こされる感情の高まりを詠嘆的に表し、基本的に独話や心内発話のような非対話的な環境に現れる。

以上の記述からわかることは、「な／なあ」はやはり独話的に用いられ、話し手自身の詠嘆、あるいは話し手が自身の感情や何らかの事態をあらためて認識・確認したことを表す表現と考えられる。

### 3.3 「と思う」

ここでは、「と思う」の機能を詳しく取り上げたものとして、森山(1992)および小野(2001)の記述を見る。(以下、各例については、本稿の執筆者が多少形を変えて引用し、適宜下線を付している。)

#### 3.3.1 森山(1992)

森山(1992)は、文末思考動詞「思う」を取り上げ、分析したものであるが、引用節内部の文の性質に着目し、「と思う」文を2種に分けている。

まず、「と思う」の内部に客観的事実として扱える内容の文がくる場合を、「思う」の「不確実表示の用法」とする(「先方は三時に来ると思います」等)。「と思う」

の内部にくる文は、「と思う」を付加しない場合には確実なことを表す（「先方は三時に来ます」）が、「と思う」が付加されることで、「先方が三時に来る」かどうかについては、不確実なものとして表現される。ただし、「だろう」などの推量表現とは異なり、「と思う」は話し手自身が「わからない」ものとして物事をとらえているのではなく、話し手なりの個人的な認識を表すものであるとしている。よって、「確か、その日は日曜日だったと思う」のように、話し手が直接確認できたようなことで、かつ、確実なこととして断定しがたいこと（記憶が不確かな場合など）についても使用することができる。この場合「？確か、その日は日曜日だっただろう」は不自然である。このように、「と思う」は無条件に聞き手に事実を伝達するものではなく、話し手の個人的な見方を表すものだとしている。

もう1つは、「日本の今の医療制度は間違っていると思う」のように、話し手の個人的な意見を表す「と思う」で、これを「と思う」の「主観明示用法」と呼んでいる。この場合、「と思う」の内部の文は、話し手の主観的な思考内容を表すという特徴がある。また、「と思う」を除いても、「日本の今の医療制度は間違っている」となり、その論理的・知的な意味での質的な違いはない。これは、個人的な意見を個人的なものとして明示する用法であり、個人的な意見をそのまま主張することが憚られるような場合においてよく見られる用法であるとしている。

ここで問題としている「かなと思う」文は、いずれも「と思う」の内部には個人的な疑問や詠嘆・認識を表す内容がくる。したがって、森山(1992)の分析に従えば、このような「かなと思う」文は、話し手が個人的な意見を個人的なものとして明示する、後者の「主観明示用法」の「と思う」文であると言えるだろう。

### 3.3.2 小野(2001)

小野(2001)は、「と思う」述語文を、そのコミュニケーション機能に着目して分析したもので、「と思う」は、聞き手に対する働きかけを有しており、その「働きかけ」には2種類あるとしている。

1つは、話し手が、話し手の思考内容を聞き手に働きかける「共有思考タイプ」である。例えば「現実のほうがドラマチックだと思います」のように、「現実のほうがドラマチックだと思いませんか」という形で、聞き手にその思考内容を確認する形式に置き換えることが可能だというものである。このタイプの「と思う」文は、思考内容自体を聞き手に働きかけており、聞き手にも思考を促す話し手の心的態度の表明であるとする。もう1つは、「個有思考タイプ」で、「この続編書き



たいなって思う」のように話し手自身の希望を述べたものや、「あなたも覚えていてくれていると思う」など、聞き手の領域において聞き手に判断する権利のあるものである。このタイプは、話し手の思考“結果”について聞き手に働きかけたもので、話し手と聞き手とが思考内容自体を共有しようとするものではない。

ここで問題とする「かなと思う」文は、いずれも「?おもしろいかなと思いませんか」あるいは「?水を差すことになるのかなと思いませんか」のような形に置き換えることはできない、よって、小野(2001)の分析に従えば、このような「かなと思う」文は、思考内容は聞き手と共有しない、後者の「個有思考タイプ」の文であるということになるだろう。

### 3.4 「かなと思う」

「かなと思う」を1つの表現として取り上げたものに小野(2006)がある。そこでは、「かなと思う」述語文のコミュニケーション機能について、話し手の思考判断などの「内的活動」という側面と、聞き手への伝え方という「外的活動」の2つの面からのアプローチが試みられている。

「かなと思う」という述語形式をとる場合、主体はまだ思考中であったり、判断が1つにまとめきれない場合もあり、その「内的活動」としては、「思考主体の意見がすべてではない」ことを表すとする。このことで、「かなと思う」は、他の意見を排除しないことを表し、話題に関係のある人や組織、他の意見への配慮を示すという。例えば、「常識的には関西州の州都は大阪かなと思いますが、[略]」という発話は、大阪以外の他の都市への配慮を示しているとする。また、聞き手への伝え方という「外的活動」の側面から見ると、「かなと思う」は、強い意思をやわらかな印象で伝えたり、自分自身の評価を控えめにする機能があるとする。例えば「(日中外相会談の)時期は主要国首脳会議以降かなと思う」という外相の発言は、やわらかな印象を与えるが、強い意志を表すものであるとしている。

この論考では、「かなと思う」を注目すべき表現として取り上げたことに意味があると思われる。森山(1992)が、「と思う」を「個人的認識の表示」であるとしたことに加え、コミュニケーション上の機能という観点から分析を試みた点が新しい。ただし、観察された個々の事例に即して、それぞれの文脈をかなり読み込んだ上で上記のような記述が行われており、論証はまだ断片的とも言える。また「他への配慮」や「和らげ」がなぜ行われるのかという点についてはそれ以上の記述がないことなどから、「かなと思う」を用いた意見表明の本質・核心は、必ずしも明

確に集約された形では記述されていないように思われる。

#### 4. 「かなと思う」の意味・用法—対立回避と自己防衛

鈴木(2012)では、ブログ等に見られる「ありがとうございます」「よろしくです」など、感動詞相当句に「です」を後続させる表現について、その機能は、読み手とのコンフリクト(衝突・摩擦)を避けるための戦略ではないかと考えた。読み手には、事の直接の当事者ではない人も多く含まれており、不特定多数の読者に向けて、直接「ありがとう」「よろしく」と感謝や依頼を述べることはしない。単にそれが自分の判断であるかのように「です」を用いることで、読み手に心理的負担をかけることや、ひいては自分自身にそれが不満や批判等として返ってくるような可能性も避けていると考えるものである。

本稿において取り上げた「かなと思う」についても、似た機能が働いているのではないだろうか。意見を表明したり、コメントを行ったりする際に、明確な発言形式をとらないことによって聞き手との間の対立や摩擦を避け、結果的に自己を防衛するという機能である。

先行研究に照らして説明すれば、冒頭に挙げた例(1)においては、発言者が仮に「おもしろいと思う」とコメントを述べた場合には、「おもしろい」という話し手の判断・考えを明確に提示するとともに、聞き手にもその思考内容の共有を働きかけることになる。一方、「おもしろいかなと思う」と述べた場合には、話し手は、「おもしろい」という判断・考えについて自分自身に疑問を表明する「独り言」形式をとることになり、これは「？おもしろいかなと思いませんか」のように、聞き手にその思考内容を確認する形にすることはできない。「と思う」によって、その思考結果を情報自体としては聞き手に示すわけだが、聞き手と思考内容を共有するタイプの発話とはなっていない。あくまで発信は行っているが、聞き手とは、その見解についての判断の共有は回避する表現方法をとっていることになる。

このような意見表明・コメントに用いられる「かなと思う」は、聞き手との対立・コンフリクトの生じる可能性を避け、ひいては自分自身の心理的負担を軽くするという機能を果たす点において、ブログ等における「～です」文との共通点が観察されるのではないかとと思われる。このことから、話題となっている事柄について、その専門家が解説・コメントを行う際にこの形式が用いられると、専門家でありながら、事柄に対する自身の見方については明言を避けるという、曖昧な主張の姿勢が感じ取れることになる。

なお、タイプ2の「かなと思う」文は、説明のモダリティを表す「のだ」の疑問の形「のか」が含まれているため、この場合の「～のかな」については、「答えは既に定まっている」と考えられる状況(田野村(2002: 54-69))において、その背景事情について話者が認識したことを表していることになる。2.2節で見た例(5)（「ここで計画を中止すると、東北地方の復興にも水を差すことになるのかなと思います。」）に即して言えば、電力買い取り制限という政府の方針転換について自分が反対の立場であることを述べるにあたって、その背景には「計画を中止すれば、東北地方の復興に水を差すことになる」という事情が既にあるものとして持ち出され、それについて、話者が実感として認識したということが「な」によって独話的に示される<sup>13</sup>。しかし、この場合も、「とします」を付加した文は、主観的な思考内容を個人的に提示するのみで、聞き手とその思考内容を共有するタイプの発話とはならず、聞き手との判断の共有は回避される表現となる。

## 5. 「かなと思う」使用の実際

ここでは、第4節で考えた「かなと思う」文の意味・機能を、観察された実例に沿って確認する。5.1節では専門的立場からの発言において、5.2節ではより広く一般のコメントにおいて用いられた例を見る。

### 5.1 専門的立場からの発言において

まず、2.1節で見たタイプ1の「かなと思う」(終助詞「かな」+と思う)について、観察された実例を見る。

- (14) <天の橋立の白砂に雑草がはびこり、景観を損なっている。10年前、台風で砂浜の砂がえぐられ、補強のために外部から持ち込んだ砂に植物の種子が混じっていたのではないかとされることについて>：京都府職員(男性・40代)  
「(10年前の補強が)ダイレクトに原因になっているのはちょっとないかなと思っています。」(14. 07. 29「ス」)

<sup>13</sup> タイプ2の「かなと思う」文では、話し手の個人的な認識が個人的な意見として表明される一方で、「のだ」によってその背景事情が既定の状況として認識されたものとして持ち出されている。あくまで個人的な認識であるとする形式をとりながら、そこに「既定性」を持ち出すということに志向性の矛盾が感じられるためか、タイプ2の「～のかなと思う」の形をとる実例の中には、「のだ」の使用が若干唐突に感じられる場合があるように感じる。

府の職員としてインタビューを受けており、原因であることを否定するのであれば、通常考えられる形式として「(それが原因になっていることは)ちょっとないのではないのでしょうか」「ないんじゃないかと思います」などのように述べられるところである。「かなと思っています」とすると、あくまで個人的な感想を独話的に述べている形式をとることになり、その思考内容、即ち「砂の補充は原因ではない」という点について、聞き手との思考の共有は行わない発言姿勢となる。個人的なコメントを個人的に述べただけという発言姿勢は、担当者として無意識のうちに言質をとられないような策をとるがゆえとも考えられる。

(15) 〈「国境なき医師団」に参加し、医療活動にあたってきたことについて、なぜそのような危険な活動にあえて従事したのかという質問に対して〉：看護師(女性・30代前半ぐらい)

「(アフリカ西部では、エボラ出血熱で亡くなっている人々がいるという厳しい現実を、日本の皆に)わかっていただければいいかなと<sup>14</sup>。」(14. 08. 06「ス」)

(16) 〈社内での接客コンテストについて、自身も出場した上での感想を求められて〉航空会社地上職の専門職員(女性・30歳前後)

「日本のよさなどもプラスアルファとして伝えていければいいかなと思っています。」(14. 09. 17「圏」)

(15) で、看護師の女性は、医療の専門家として医師団に参加した理由を問われているのだが、「厳しい現実を皆にわかってもらいたいと思ったんです」「少しでもわかってもらえたらいいと考えて、参加したんです」などと明確に自身の主張を述べることはしていない。(16) の女性も、専門職の立場からコメントを求められているのだが、外国からの乗客に笑顔やもてなしの心を伝えられたらいいということを、「かなと思う」により、あくまで個人的な意見・感想として述べている。

(17) 〈日本語教育学会 2014 年度日本語教師研修「反転授業入門」の事前講義ビデオより〉：向後千春講師(男性・50代)

「はい、ということですね、[中略]皆さん、ちょっとこう、eラーニング、それから対面授業、ということでも組み合わせる時にどういものが可能か、

---

<sup>14</sup> この場合、「と」に後接する動詞「思う」は省略された形となっており、補うとすれば「わかっていただければいいかなと思いました／思ったんです」のような形になる。「思う」「言う」などの補文動詞を伴わないこのような文末の「と」を、情報・発言の出所が話者であることを示す、「証拠表示」の機能語であると考えられる(柴崎(2005))。ここでは動詞「思う」が省略されたものとして、このような例も「かなと思う」の一例として扱っておく。

自分の授業にどういうふうに、こう応用できるのか、というのを、ちょっと考えてきていただけるとうれしいかなというふうに思います。」

(14.10.20「YouTube」<https://www.youtube.com/watch?v=qnzreb9JmmE>)

(17)では、「うれしいです」「うれしく思います」などと直接的には述べず、「うれしいかなというふうに思います」と、「かなと思います」にさらに「(と)いうふうに」が付加される形で述べられている<sup>15</sup>。「かなと思う」を用いることで、「(考えてきてくれると)うれしい」という自身の側の感情については、個人的な感情として聞き手とあえて共有はしない形で述べ、さらに「(と)いうふうに」を用いることで、その思考活動を自身とは距離を置く形で一步引き離して提示している。不特定多数の聞き手が対象であることに加え、その聞き手を直接目の前にしないビデオ講義という形式をとっていることから、自身を強く前に押し出さない、このようなタイプの発話が生じているのではないかと考えられる。

なお、このように「うれしい」等の感情形容詞に「かな」が後接する場合には、自分自身の感情に対して自身で疑念を呈するという表現となり、「難しいかなと思う」「おもしろいかなと思う」など、属性形容詞によって対象を評価するようなコメントとは、意味的にはかなり異質な表現となる。

次に、2.2節で見たタイプ2の「かなと思う」(「(の) + 終助詞「か」 + 終助詞「な／なあ」 + と思う)について実例を見る。

(18)〈スイスの山岳鉄道で起こった脱線事故について〉: 鉄道関連の専門家(男性・40～50代)

「(景観保護の観点から、スイスの鉄道はコンクリートで補強するなどということは)日本と比べると、あまりないのかなあと。」(14.08.14「ス」)

報道番組の中で鉄道事故のニュースが扱われた際に、画面字幕に「専門家は」と入れながら、その背景事情についてのコメントを求めている。ここでは、「コンクリートで補強するということは(日本に比べると)あまりない」という背景事情があると思われることが、「な」によって、話者があらためて認識したものとして独話的に示されている。また、「と思う」を付加しても、その主観的な思考内容は聞き手と共有する形とはならない。専門家のコメントとしては、明確に述べる

<sup>15</sup> 渡邊(2010)は、国会会議の場における発言を調査し、「と思います」に比べ、「という{ように／ふうに}思います」という形式の使用率が時代とともに上昇していることを示し、その原因は、話者が自身の動的な思考活動を、自身から心的距離を置いて提示者として提示するという働きにあると分析している。

ことを避けた、曖昧な発言となっているという印象を受ける。

(19) 〈一人で複数の高齢者を介護する「多重介護」の問題について〉：医師（女性・40代ぐらい）

「それぞれ病気が違っていたり、ケアするポイントも違うわけですから、(多重介護を行っている人は) 精神的にも肉体的にも大変なのかなと思っています。」(14. 11. 10「現」)

医師は専門的立場からのコメントを求められているが、「精神的にも肉体的にも大変なのではないか」という通常の意見表明に用いられる述べ方はしていない。事態の背景には「大変だ」という事情があると考えられることを、独話的な形をとってコメントしている。

この他に、BCCWJの検索ツール「少納言」を用いて、国会会議録（1976～2005年、159件、約510万語）のサンプルを対象に、「かな（あ）と思」で単純に文字列検索を試みた。この形式を用いて意見・コメントを述べていると思われる例を年代ごとに探ると、1970年代に1例、1980年代に5例、1990年代に22例、2000年代に24例観察された<sup>16</sup>。以下、その一部の例である。

(20) 非営利法人をどんどん活発化させて、そうした活動に期するというのも私  
は一つの方法かなと思います。（衆議院/常任委員会、第136回国会、1996年）

(21) 現実問題としてはなかなか大変なことであるかなと思います。

（参議院/常任委員会、第147回国会、2000年）

(22) 「環(わ)の国」日本、非常にいい言葉かなと思います。

（衆議院/その他、第151回国会、2001年）

(23) 日本経済がそれでマイナスになるという話は少しちょっと変かなと思って  
おります。（参議院/その他、第163回国会、2005年）

(24) ディスクロージャーといってもこれはなかなか大変なことになるというこ

<sup>16</sup> 注11で述べたように、本来意見表明に用いられ得る形式を含む「～のではない(の)かなと思う」「～ではない(の)かなと思う」、およびその派生形と考えられる「～(の)」では/「じゃ」なろうかなと思う」は除いた。また、「むべなるかな」「(～するもの)何かかなと思う」「(～するのは)」「どう/いかが」かなと思う」のように固定した形で用いられている例、「思う」主体が話者ではなく「あなたも『そうかな』と思いませんか」「人は『～かな』と思うのではないのでしょうか」と引用の形で用いられている例、あるいは文脈から「思う」の主体が判然としない例、「どうしようかなあと思いました」のように、本来の「疑念表明」として用いられていることが文脈から読み取れる例も除いた。ただし、単に疑念を表明しているだけであるのか、この形式を用いて何らかのコメントを行っているのかは、文脈を広くとらえないと判断しにくいところもある。

- とがあるのかなと思うんです。(参議院/常任委員会, 第142回国会, 1998年)
- (25) ただ、現行の制度の枠内で考えると、結構限界があるのかなと思っています。  
(衆議院/常任委員会, 第162回国会, 2005年)
- (26) きちんと育てられる、そういう仕組みもないと少子化というのはなかなか  
厳しいのかなと思っています。(参議院/その他, 第163回国会, 2005年)
- (20)～(23)は、タイプ1の「かなと思う」、(24)～(26)は、タイプ2の「かなと思う」  
形式となっている。

## 5.2 一般のコメントにおいて

専門家が使うほどに違和感は目立たないが、実は多くの人がコメントを述べる際に「かなと思う」を使っていることが観察される。

- (27)〈プロ野球ドラフト会議を前に、指名を待つ注目選手の発言〉:野球部員(男性・高校3年生)  
「夢が実現できたらいいかなと思っています。」(14. 10. 23「7」)
- (28)〈猛暑の中、“冷やし”天丼や「冷やしうどん」など、冷やした食事メニューが人気であることを紹介する番組コーナーで〉:人気店常連客(男性・20代)  
「夏はこの店の冷やしカレーうどんがあれば、乗り切れるかなと思います。」  
(14. 08. 15「J」)
- (29)〈東北地方の漁港都市で秋刀魚祭りのイベントが行われ、炭火焼きの秋刀魚がふるまわれている〉:イベント会場の来客(女性・30～40代)  
「(脂ものっているし、炭火で焼いているので)うちで焼くのとは違うかなと思います。」(14. 09. 23「おび」)
- (30)〈インタビュー形式で構成された洗濯用洗剤のCM〉:(女性・30代)  
「制服のお洗濯はやっぱり気を遣いますね。人前にも出るんで、きれいにしてあげたいかなあって。」(14.12.14「ウルトラアタックネオ」KAOのCM)
- (30)のように「～たい」に「かな」が後接すると、自分自身の行為についての願望に自分自身で疑念を呈するという表現をとることになる。

## 6. まとめ

社会の変化とともに、言葉の使われ方も変化する。ここで見てきた「かなと思う」は、インターネット等の通信形態が発達した現代社会においてこそ見られる、意見表明の際に用いられるようになった表現ではないかと思われる。インターネット

トなどの通信を通じて情報が瞬時のうちに拡散する社会では、ある1つの発言が不特定多数の人を様々な意味において刺激することとなったり、その結果として何らかの対立やトラブルを生み出すことになる恐れがあることも否定できない。意見を表明したり、ある問題にコメントをしたりする際には、他の人を刺激しないように、また専門的立場からの発言であればなお慎重に言葉を選び、自己防衛するというスキルが発達するのはやむを得ないことかもしれない。「かなと思う」という形式により、聞き手と思考内容は共有せず、あくまで個人的な見解であることを示しつつコメントするというのは、主張を曖昧にしつつ、自己防衛を行うとする発言の姿勢であると言えるのではないだろうか。

このように用いられ始めた「かなと思う」は、通常の見意見表明の形式として、さらに一般の人々のコメントや感想にも用いられるように広まってきているのではないかと思われる。

## 参考文献

- 安達太郎 (2002) 「質問と疑い」仁田義雄・益岡隆志・田窪行則シリーズ編著『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版 pp.174-202
- 小野正樹 (2001) 『「トと思う」述語文のコミュニケーション機能について』『日本語教育』110号 pp.22-31
- 小野正樹 (2006) 「新しい文法—「かなと思う」について—」『日本語学』第25巻第9号 明治書院 pp.46-56
- 小池清治他 (編) 『日本語表現・文型事典』朝倉書店
- 柴崎礼士郎 (2005) 「証拠表示化する『と』と談話構造—頻度から見た文法化の層状的拡大—」日本語学会『日本語の研究』第1巻第4号 pp.47-60
- 鈴木智美 (2012) 「ニュース報道およびブログ等に見られる『～です』文の意味・機能—『～を徹底取材です』『～に期待です』『～をよろしくです』」『東京外国語大学論集』第84号 pp.341-357
- 田野村忠温 (2002) 『現代日本語の文法I 「のだ」の意味と用法』和泉書院
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003) 『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版
- 野田春美 (2002) 「終助詞の機能」仁田義雄・益岡隆志・田窪行則シリーズ編著『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版 pp.261-288
- 文化庁 (1990) 『外国人のための基本語用例辞典 (第三版)』大蔵省印刷局 (初版1971年)
- 三宅知宏 (2000) 「疑念表明の表現について—カナ・カシラを中心に」『鶴見大学紀要 第I部 国語・国文学編』第37号 pp.左8-21



- 宮崎和人 (2002)「確認要求」仁田義雄・益岡隆志・田窪行則シリーズ編著『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版 pp.203-227
- 森山卓郎 (1992)「文末思考動詞『思う』をめぐって—文の意味としての主観性・客観性—」『日本語学』第11巻第9号 pp.105-116
- 渡邊ゆかり (2010)「国会会議の発言中に現れる意向・意見・見解表明文の変遷—『と思います』『という{ように/ふうに}思います』の交替—」『広島女学院大学国語国文学誌』40号 pp.1-18

## 実例採取

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) 国立国語研究所「少納言」  
(<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>)
- 「日本語教育学会 2014 年度日本語教師研修『反転授業入門』の事前講義ビデオ」  
(<https://www.youtube.com/watch?v=qnzreb9JmmE>) (2014 年 10 月 4 日公開)

- 「ス」 : 「スーパーニュース」(フジテレビ)
- 「7」 : 「ニュース7」(NHK テレビ)
- 「圏」 : 「首都圏ネットワーク」(NHK テレビ)
- 「現」 : 「クローズアップ現代」(NHK テレビ)
- 「J」 : 「J チャン」(テレビ朝日)
- 「おび」 : 「ひるおび!」(TBS テレビ)

Japanese “...*kana to omou*” Construction  
Used to Express Opinions and Comments:  
A Construction to Avoid Conflicts and Frictions and to Protect Speakers

SUZUKI Tomomi

The purpose of this paper is to examine the meanings and functions of Japanese expression “...*kana to omou*”. This expression is recently observed in TV news programs or interviews by specialists or by general people. They use it to express their opinions or to give some comments on current affairs.

“...*kana to omou*” is used to avoid possible conflicts or frictions between the speaker and the audience by not sharing the judgments of the speaker. By using “...*kana*” or “...*na*” in a complement clause of “*to omou*” can give a monologue like tone. Consequently the speaker’s opinion is softened and will sound less assertive.

I think this is a way to protect oneself from oppositions and avoid possible complaints from others. It is used as a new kind of communication strategy.